

西郷は、島の子供たちにも相撲、読み書き、精神訓話などを通じて積極的に関わっていった。

裏表の無い誠実さで島人達に接し始めた西郷が、彼らから全幅の信頼を得るようになるにはそれほど時間を要さなかった。

こうして、入島1年目の安政6年12月、島の有力者の世話により島内の女性愛加那と所帯を持つに至っている。

「尚々、野生には不埒の次第にて、正月二日に男子を設け申候、お笑ひ下さるべく候。」

長男菊次郎の生まれた時の、友人にあてた手紙の一節である。

子供の出来た手放しの喜び、照れ臭さ、そして居直りなどの心理が一行の中に凝縮して表現されている。

また、一年が経つ。

心の底ではいつでも帰藩を願っていた西郷であったが、その頃には復歸への焦燥感からは抜け出しており、藩からの召還がなければ、そのまま一生島で過ごしてもよい、という心境になりつつあった。

鹿児島出身の小説家、海音寺潮五郎氏は「史伝西郷隆盛」の中で、島での西郷の心模様を次のように推論している。

「……当時、西郷は『尽人事、待天命（人事を尽くして天命を待つ）』と大書きした額を壁間に掲げていたという。また、『敬天愛人』とは、後年彼が好んで書いた文字だが、この頃から天に任せきる信仰と、私欲を去って人の為に尽くすのが道の本然である、という悟りに達したのではないか。

言うまでもなく『敬天』は月照と共に投身して自分だけが助かったということに対する悩みの末の開悟であり、『愛人』は彼の生まれながらの本性でもあるが、島民との接触や、子供らを教育している間に磨きが掛かって一つの悟りとなったのであろう。……」